

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21H00600

研究課題名（和文）璽印・ガラス・鉄器からみた西暦1～3世紀日本列島・東アジアの広域交流の重層性

研究課題名（英文）Broad interactions between the Japanese archipelago and its surrounding East Asian regions from the first to third centuries, A.D. at different social levels: Approach from seals, glasses, and iron

研究代表者

石川 日出志（ISHIKAWA, Hideshi）

明治大学・文学部・専任教授

研究者番号：40159702

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、璽印・ガラス・鉄器からみた西暦1～3世紀日本列島・東アジアの広域交流を重層的に描き出すものである。璽印は、漢魏晋代に各王朝から周辺諸族に対して称号とともに政策的に授与された外交を実証する文物である。ここでは亀鈕・駝鈕・蛇鈕を型式学的に分析することにより、前漢末から後漢初期に王朝内の官僚制度と周辺諸族に対する政策が整備されることを描き出した。ガラス製品の蛍光X線分析では、中国南部と北方草原地帯の二方面から日本列島にガラス製品と素材が流通したことを確認した。前漢以来の上位層における鉄製武器副葬も朝鮮半島・日本列島に広まる。これらを外交から物流まで重層的に理解するよう努めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

弥生時代中期末から後期における、中国の漢～魏代や朝鮮半島との外交や広域的物流の研究には一定の蓄積がある。しかし考古学分野では、外交は漢魏鏡による研究がもっぱらで、外交を正面から論じるのは困難であった。本研究では、璽印の亀鈕・駝鈕・蛇鈕の型式学により、前漢末から後漢初期に官僚制度と周辺諸族への外交政策が整備される状況を描き出した。また、ガラス装身具は東南アジア方面から招来されたという説があるが、本研究の蛍光X線分析により、その素材は中国南部と北方草原地帯から日本列島にもたらされたことを解明した。鉄製武器の副葬習俗も前漢方式が朝鮮半島と日本列島に波及する。これらを重層的に理解する必要がある。

研究成果の概要（英文）： Our aim is to reveal the broad interactions between the Japanese archipelago and its surrounding East Asian regions from the first to third centuries, A.D. at different social levels: approach from seals, glasses, and iron. We classify the tortoise, camel and snake shape knobs of seal-string, and clarified the consolidation process of bureaucracy system and foreign policy. From the fluorescence X-ray analysis of glass beads we conclude that glass materials were traded from the southern China and the steppe regions of Mongolian plateau to the Japanese archipelago. The burying customs of iron weapons in Former Han Dynasty were also expanded to the Korean Peninsula and the Japanese archipelago. These multilayered features of the broad interactions need further attention.

研究分野：考古学

キーワード：璽印 ガラス 鉄器 西暦1～3世紀 日本列島 東アジア 広域交流

## 1. 研究開始当初の背景

弥生時代後期は、日本列島内各地の広域交流が急速に進行し、やがてそれが政治・宗教的連携へと転化・強化され、次の古墳時代社会の形成へと繋がった時期である。本研究の核心をなす学術的「問い」は、こうした日本列島内諸地域間の広域交流と連携がどのように構築されたのか、またそこに朝鮮半島やアジア本土の諸地域が相互にどのように関わるのかにある。本研究では、この問いに、璽印、ガラス製品、鉄製武器・利器を主とする大陸系考古資料の分析によって具体的に答える。

代表者の石川は、2010年以來「漢委奴國王」金印の考古学的研究に取り組み、中国の南京大学・中国社会科学院との学術交流の中で中国古代璽印の調査も行ってきた。これにより璽印研究を軸に古代東アジアの中央と周縁・周辺の問題に取り組む必要性を痛感した。また、代表者を補佐する中村は、長らく朝鮮半島青銅器～初期鉄器時代研究を進める中で、北アジア及び東南アジアとの関連も視野に入れる必要性を感じてきた。

これを受けて、石川が代表を務める明治大学日本古代学研究所では、2014～2018年度に文科省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「日本古代学研究所の世界的拠点形成」を組織し、その中で、石川が金印を取り巻く璽印研究、中村が携行型蛍光X線分析装置を用いて日本・モンゴル等のガラス製品の調査・分析することにより東アジアの広域流通に関する研究を進めた。また、中村は科研費基盤研究(B)「初期遊牧社会における社会複雑化とユーラシア東西交易路の復元に関する包括的研究」(2018～2020年度)でも、北アジア草原地帯の資料分析を進めた。

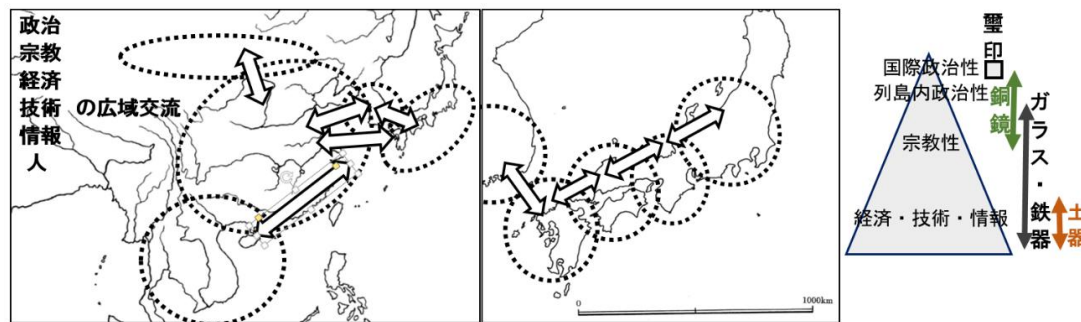
また石川は、千曲川流域で大陸系鉄器・青銅器が集中するのに注目し、分担者の高橋は朝鮮半島～北陸における弥生～古墳時代のヒスイ等の広域流通と社会変化の研究を進めてきた。そして石川・高橋は、2015年度から長野県木島平村平塚遺跡調査指導委員会の一員として、朝鮮半島から東日本までの広域交流の実態を研究するには1996～2000年に発掘調査された同村根塚遺跡資料・データを再検討する必要性を共有した。同村教育委員会も十分に理解され、2020年度から再検討作業を進め、2023年春にその成果を公表した(『長野県下高井郡木島平村内弥生時代遺跡―根塚遺跡・平塚遺跡・三枚原遺跡・宮の島遺跡―』木島平村教育委員会)。

このように大型研究での研究成果を基盤とし、さらに鉄製武器とその副葬習俗の研究およびその具体例である根塚遺跡の再検討を加えて総合することによって、西暦1～3世紀のアジア～日本列島の広域にわたる交流の実態を、政治・宗教・経済・技術・情報・人の面から具体的にかつダイナミックに描き出すことが可能となっている。

## 2. 研究の目的

本研究は、日本列島内における大陸系文物の流通・普及状況を読み解いて、日本列島内の各地域どうしがどのように連携し、それが変化・強化されていくのか。そしてそこに朝鮮半島を含む東アジアの諸地域社会がどのように関わるのか。それらを重層的に明らかにする。この「重層的」とは、本研究の対象資料である璽印、ガラス製品、鉄製武器・鉄斧(とその副葬)は、当時の社会に果たした役割にかなり顕著なレベル・位相差があり、これらを構造的に把握することが必要であることを指す。

例えば「漢委奴國王」金印は、その授受は光武帝と倭奴国王との国際関係の行使だが、当初駝形鈕で製作されたのち蛇鈕に改変されたことは、周辺諸民族のなかの倭に対する漢王朝の認識が反映している(漢王朝内の諸民族認識の重層性)。この印は北部九州の最上位者に授与されたが、同時期の北部九州の最上位層には同じく漢王朝や楽浪郡から入手した銅鏡や鉄刀・ガラス製品など、さらに有力首長層には銅鏡・ガラス製品や朝鮮半島から舶載された鉄製武器・利器類が保有されるという階層的な重層性をもっている(北部九州内の重層性)。璽印以外の文物は、さらに北部九州から東日本までの間の諸地域間でも重層性をもって流通した(地域間の重層性)。弥生時代後期の広域交流には、従来ともすれば土器などから日常的レベルの交流を描いて社会までも語る傾向があつて、銅鏡による議論と乖離していた。璽印レベルから土器レベルまでを重層的・構造的に読み解くことが必須である。



<本研究が描き出す AD 1～3 世紀の広域交流と日本列島内の重層性に関する模式図>

### 3. 研究の方法

本研究の目的を達成するために、3つのテーマを設け、韓国・中国の研究者の協力も得る。銅鏡も独立したテーマにすべきだが、すでに研究成果も蓄積されており、総合の際に組み込む。これらによる分析成果を、東アジアから日本列島、日本列島も北部九州から中部・関東までの広域の資料とデータを重層性とその構造的な理解というキーワードで接続する。各テーマの課題・方法・目標は次の通り。

テーマ1 (璽印)： 課題は、①. 「漢委奴國王」金印の検討、②. 漢魏晋代歴代王朝が周辺諸民族に与えた四夷印の検討、③. 漢魏晋代の墓葬出土印を主とする璽印の集成と考古学的検討、の3点である。①のうち、この金印自体の金属組成・法量・鈕形・鈕孔・印面字形に関する研究はほぼ完了しており、当初駝鈕として製作されたのち蛇鈕に再加工されたことの傍証として、駝鈕・亀鈕印の集成に基づく型式学的分析と、漢代前後の蛇と獣形の図像を分析して、この金印が後漢初期の鈕型式と獣形様式に合致することを示す。②は四夷印の集成により、駝鈕・馬鈕・蛇鈕・羊鈕を型式学的に分析し、「漢委奴國王」金印との比較から漢王朝の倭に対する認識と四夷における位置を読み解く。③は「璽印の考古学」という新分野を確立するための基盤形成である。

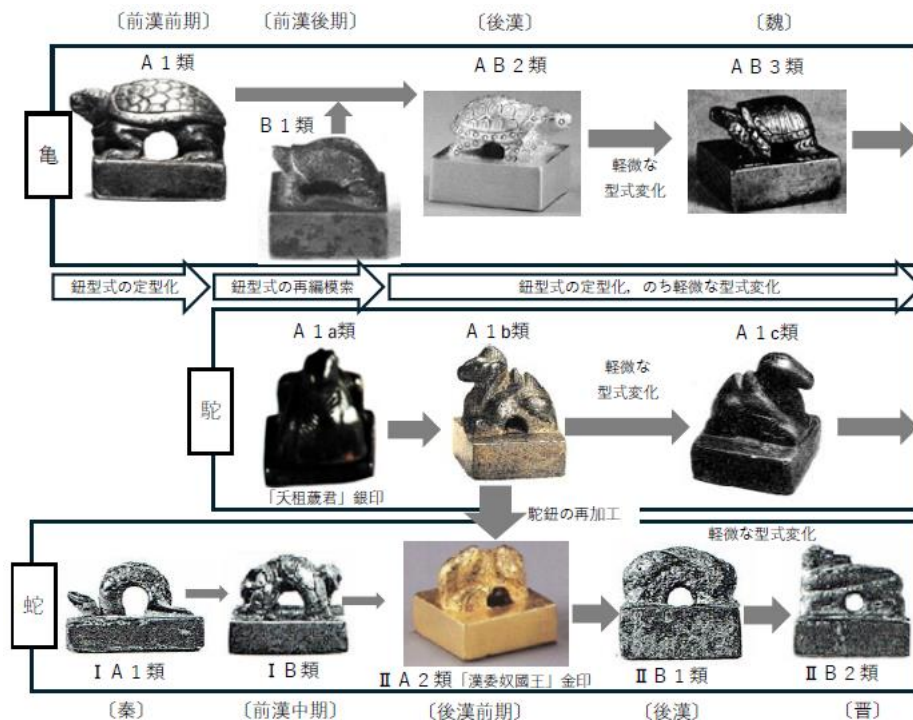
テーマ2 (ガラス)： 課題は、日本列島を含むアジア地域の広域にわたる物資の流通網を復元することである。前2世紀末の楽浪郡成立以降、地中海から日本列島までのユーラシアを横断する交易ネットワークが形成され、主としてインド・パシフィックビーズ(IPB)と呼ばれるガラス小玉が大量に流通する。インドと、ベトナム北部から華南で生産されたガラス小玉が主体であることは判明しているが、その詳細な産地及び経由地は未だ明らかではない。本研究では、生産地と経由地の両面をもつベトナムを中心に蛍光 X 線分析を行いつつ、日本国内のデータとの詳細な比較を試み、その交易ルートを解明する。加えて、弥生時代後期に中部地域及び関東平野で急増するガラス小玉の流通経路の復元とその背景について検討を進める。蛍光 X 線分析は、明治大学古代学研究所が保有する分析機器＝携帯型の Ourstex100FA を用いる。

テーマ3 (鉄器)： 課題は、①. 鉄製武器・利器が中国および朝鮮半島から日本列島に広く普及する実態の把握、②. 鉄製利器・ガラス製品を副葬する習俗の広域分布とその形成過程の把握、③. 朝鮮半島系鉄製武器の東端の出土例でありながら基本情報の精査が必要な長野県木島平村根塚遺跡資料の分析・整理である。①は、中期後半から中国・漢型式の素環頭刀と朝鮮半島系の鉄剣が日本列島に普及し始めるが九州に限定的であったのが、後期になると日本海側を中心に中部・関東まで波及する。小形武器・利器類を含めて出土例を集成する。②の鉄器副葬習俗は後期前葉に北近畿まで、後葉には中部・関東にも及ぶ。副葬例の集成を行って、広域にわたる連動性と地域的差異を把握する。③は基礎資料整理から実施するため3か年を要する。朝鮮半島製品の可能性が指摘される渦巻形飾付鉄剣(日本で唯一の例)やガラス製品、さらに未報告の朝鮮半島系資料もある根塚遺跡例は①②およびテーマ2も包摂する意味をもち、本研究の課題である広域交流とその重層性を構造的に把握する上できわめて重要な位置を占める。

### 4. 研究成果

テーマ1では、璽印考古学という一分野を提唱するとともに、特に亀鈕・駝鈕・蛇鈕の3種の動物形の鈕形を採り上げ、秦代から漢代を経て魏晋代までの型式学的な整理を行った。その結果、鼻鈕や覆斗鈕といった実用的な鈕形とは別に、秦代に亀鈕と蛇鈕という2種の鈕形が出現し、このうち亀鈕が前漢前期に官印の鈕形の標準となり定型化する。ところが前漢後期には新たな亀鈕型式の模索が始まり、新莽代から後漢前期に再び定型化する。前漢後期に北方諸族の外臣向けの鈕形として駝鈕が出現し、後漢代に定型化する。その定型化した駝鈕として製作された「漢委奴國王」金印が蛇鈕に再加工され、これがその後の蛇鈕の基本形となった。しかし、内臣用の官印としての亀鈕はその後も精緻な造形が持続する一方、外臣向けの駝鈕と蛇鈕は粗雑化・簡略化あるいは形式化が進行する。璽印の鈕形の型式学は、秦漢魏晋代における官僚制度や周辺諸族への対応の一端を明らかにした。また、その中に「漢委奴國王」金印を位置付けることで、倭・倭国の外交とそれに伴う交流・物流および日本列島内の地域社会を考える糸口となった。弥生時代の素環頭鉄刀と織物類がその物証としてもっと注視すべきことにも触れた。

従来、こうした漢～魏王朝と倭・倭国との外交交渉については文献史学の成果が重要視され、考古学でも銅鏡の研究からアプローチすることによってかなりの成果を挙げた。しかしながら『魏志倭人伝』における魏皇帝の詔書に明記されるように、外交においては称号と印綬の授与が最上位であって、賜物は絹毛織物に始まり、五尺刀・銅鏡および采物という序列がある。このうち最上位の印綬を考古学的に検討し、議論できる道を本研究で示した点がもっとも重要な成果であると考えられる。またその過程で、「璽印考古学」という一分野を立ち上げて、歴史ある璽



＜亀鈕・駝鈕・蛇鈕をめぐる両漢代前後の動向＞

印研究に新たな局面を開くことができたことも強調しておこう。

しかしながら、研究計画では中国における墓葬出土印や楽浪漢墓の出土印の資料調査を予定していたが、コロナ禍でことごとく中止を余儀なくされた。中国における墓葬出土印に関する文献収集と、日本国内で所蔵される璽印の資料調査を行うにとどまった。

テーマ2では、携行型の蛍光X線分析装置を用いて、ベトナム・モンゴルでガラス玉類の分析を行い、IPB (Indo-Pacific Beads) のアジアにおける流通状況について、重要な研究成果を得ることができた。一つには、日本におけるIPBガラス玉類はこれまで中国南部からベトナム方面からもたらされたと考えられてきた。しかし、ベトナムの出土資料を分析することにより、化学組成は同類であるものの色調に違いがあることから、ベトナムの製品が日本列島にもたらされたのではなく、中国南部であろうという見通しを得ることができた。またモンゴル出土玉類の分析によって、この北方草原地帯も弥生時代後期の北部九州にもたらされたガラス玉類の流通経路であることが明確になった。さらに日本列島内の資料のうち、長野県北部の根塚遺跡のガラス小玉の分析を行い、近畿北部を介して北陸経由でもたらされたと判断した。

このような重要な成果を挙げたものの、なおアジア各地のガラス玉類の分析データは十分とは言えず、今後とも分析・調査の蓄積を図る必要がある。



＜前1世紀から後1世紀のガラス後裔機ルート推定図＞

テーマ3に関しては、鉄製武器副葬の情報収集を進めたが、その分析を十分果たすまでには至らなかった。しかし、研究の発端となった根塚遺跡の渦文飾鉄剣および他2点の鉄剣、同じく長野県上田原遺跡の鉄矛の調査も行って、朝鮮半島の製品とみるべきことを確認した。このことに関して根塚遺跡の既出資料から見出された瓦質土器を蛍光 X 線分析することによって、その形態的特徴だけでなく化学組成の点で在地の弥生土器や古墳時代～古代の須恵器との識別ができた。このことは渦文飾鉄剣の評価ともかかわる。この鉄剣は74.5 cmの長剣であり、把部で素材の厚みが8 mmもあること、さらには渦文飾が三韓でも弁韓地域に特徴的であることから弁韓で製作されたことは疑えない。しかし、剣製把形態が東日本で縄文時代中期から長らく用いられてきた鹿角製短剣の系譜をひくことは、特注品とみる見解を支持する。では、その特注情報はどのように実現したのか、この問題を考える糸口になる。ただし、瓦質土器であって煮沸具と考えにくい点は、この製品の発注者・地域と製作者・地域とが直接接触したことまで言及するのを躊躇させる。こうした瓦質土器を含む三韓土器が日本海沿岸にどのように分布するのかを再確認する必要が出てきた。

本研究で残された最大の課題は「広域交流の重層性」である。漢・魏王朝との外交による朝献品とそれに対する称号と各種賜物の授与に関しては、従来は銅鏡が重要視されてきた。別途作成した報告書第2章でも、大型鏡は外交的交渉によることが確実視されるものの、中型鏡は漢代には商品として流通しているとも言われており、両者をどう扱い分けるか難しい。ガラス玉類は漢代の中原地域では希薄で、むしろ中国南部や沿岸部に顕著であることから漢の中枢を介すことなく流通する、外交とは異なる交易形態とみられる。さらに楽浪・帯方郡から三韓を経て倭・倭国間の交流・交易もある。さらには、弥生時代後期は、日本列島の利器がほぼ鉄器化を達成した段階であり、その鉄利器と鉄素材はもっぱら弁辰地域からもたらされたが、それは弥生文化の全領域とあらゆる階層に行き渡っている。日本列島と東アジアの交流の重層度を読み解く作業は中途の状態であり、課題として残されたままである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 4件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 石川日出志	4. 巻 第33号
2. 論文標題 漢魏晋代印駝鈕の型式学・試論	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 古代学研究紀要（明治大学日本古代学研究所）	6. 最初と最後の頁 3-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田村朋美	4. 巻 88
2. 論文標題 ガラスの考古科学	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 文化財科学	6. 最初と最後の頁 47-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村大介・木山克彦・臼杵勲・庄司哲朗・アンフバイル-バツォ リ・ガルダン-ガンバートル・ロチン-イ シツエレン	4. 巻 59（1）
2. 論文標題 青銅器時代からウィグル時代の記念構築物と城址	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 埼玉大学紀要（教養学部）	6. 最初と最後の頁 75-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 石川日出志	4. 巻 70-3
2. 論文標題 弥生時代における広域分布土器型式の形成と展開	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 考古学研究	6. 最初と最後の頁 12-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川日出志	4. 巻 第31号
2. 論文標題 秦漢魏晋代印・蛇鈕の型式学	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 古代学研究紀要（明治大学日本古代学研究所）	6. 最初と最後の頁 3-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村大介・田村朋美	4. 巻 第32号
2. 論文標題 アジアにおける漢代併行期のガラス流通	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 古代学研究紀要（明治大学日本古代学研究所）	6. 最初と最後の頁 18-2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tamura T, Nakamura D, Bayarsaikhan J, Houle J, Tuvshinjargal T.	4. 巻 22-2
2. 論文標題 Scientific analysis on the glass beads from the xiongnu burial of Zamiin Utug.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Nomadic heritage studies.	6. 最初と最後の頁 89-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 中村大介	4. 巻 57(1)
2. 論文標題 細形銅剣出現後の日韓青銅器流通と鉛同位体比	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 埼玉大学紀要（教養学部）	6. 最初と最後の頁 85-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Nakamura D, Tamura T, Eregzen G, Lochin Ishitseren, Odbaatar T.	4. 巻 40 (6)
2. 論文標題 Scientific and archaeological approach for the Glass beads trade of Xiongnu and Xianbei.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Studia Archaeologica.	6. 最初と最後の頁 50-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Nakamura, D., Tamura, T., Eregzen, G., Yeruul-Erdene, Ch., Bayarsaikhan, J., Odbaatar, T.	4. 巻 5
2. 論文標題 Glass beads trade of Xiongnu and Xianbei: scientific and archaeological approach	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 MEDIEVAL ANTIQUITIES OF PRIMORYE	6. 最初と最後の頁 486-507
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 田村朋美	4. 巻 35
2. 論文標題 元素分析および同位体比分析から見る古代ガラスの産地	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 海洋化学研究	6. 最初と最後の頁 151-155
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 中村大介・臼杵勲
2. 発表標題 匈奴の実像を求めて
3. 学会等名 国際シンポジウム「草原世界の匈奴」(国際学会)
4. 発表年 2023年



1. 発表者名 石川日出志
2. 発表標題 漢魏晋代印・駝鈕の型式学・試論
3. 学会等名 国際学術研究会「交響する古代」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 石川日出志
2. 発表標題 弥生時代における広域分布土器型式の形成と展開
3. 学会等名 考古学研究会第69回総会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 石川日出志
2. 発表標題 高敞・五湖里3号石室墳出土南朝印の璽印考古学的検討
3. 学会等名 韓国・忠南大学校 第68回百濟研究公開講座（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 豊島直博
2. 発表標題 (基調講演) 弥生・古墳時代にかけての刀剣類の変遷とその研究動向
3. 学会等名 古代歴史文化協議会共同調査研究事業第14回研究集会（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 石川日出志（編）・中村大介・田村朋美・谷澤亜里	4. 発行年 2024年
2. 出版社 明治大学考古学研究室・日本古代学研究所	5. 総ページ数 84
3. 書名 令和3（2021）年度～令和5（2023）年度科学研究費補助金基盤研究（B） 課題番号21H00600 璽印・ガラス・鉄器から見た西暦1～3世紀日本列島・東アジアの広域交流の重層性 研究成果報告書	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	中村 大介 (NAKAMURA Daisuke) (40403480)	埼玉大学・人文社会科学部研究科・教授  (12401)	
研究分担者	橋本 裕行 (HASHIMOTO Hiroyuki) (80270776)	奈良県立橿原考古学研究所・その他部局等・特別研究員  (84602)	
研究分担者	山本 孝文 (YAMAMOTO Takafumi) (40508735)	日本大学・文理学部・教授  (32665)	
研究分担者	石黒 ひさ子 (ISHIGURO Hisako) (30445861)	明治大学・研究・知財戦略機構（駿河台）・研究推進員  (32682)	
研究分担者	高橋 浩二 (TAKAHASHI Koji) (10322108)	富山大学・学術研究部人文科学系・教授  (13201)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	豊島 直博 (TOYOSHIMA Naohiro)  (90304287)	奈良大学・文学部・教授  (34603)	
研究分担者	田村 朋美 (TAMURA Tomomi)  (10570129)	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・主任研究員  (84604)	
研究分担者	谷澤 亜里 (TANIZAWA Ari)  (50749471)	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・研究員  (84604)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 国際学術研究会 < 交響する古代 > 12 ~ 14	開催年 2021年 ~ 2023年
--------------------------------------	----------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関